

なにかおかしい。なんだろうなあ。美人院長の日はなるべく避けているのになんてかなあ。最近気づいたことがある。禁止の掲示が多い。メモしてみた。ほくは結構しつつこのです。全部書きだしてみる、のはやめにしていくつかを。

「院内でマスクを外す行為はご遠慮下さい。」から始まって「足をのせないで下さい」なんてのもある。なんだとおもいます？

「暴言・暴力・セクハラはお断り致します。直ちに警察・警備に通報いたします。」てのはそういう被害を受けたことがあるのでしょうかね。

禁止だけではないのだけれど、全体としてダメダメだと言われているみたいなき感じになる。通院のたびに読んでいて少々窮屈になってきたのだろう。

では他の病院はどうかと、歯科と内科・皮膚科であらためて見回してみた。しつこいな。

入口に新型コロナウイルス対策の型どおりの張り紙があるだけ。院内には、健診や予報接種の案内があるだけ。ダメダメ掲示はない。

張り紙をほくのようにしつこく見る患者はそうそう居るとは思えないが、このあたりの違いを患者としてなんとなくくいい感じ。とか、なんか変、とか感じるのかも。院長の性格、患者への接し方の違いの

ですかとおおすねした。ハイ、とやはりカルテに向いたままの返事。

先生がこちらを見てくれない、とはよく聞く苦情だ。確かに対話が苦手、出来ないのは診察医師としては困りますね。そう、人間相手が苦手なあなたには顕微鏡がある。山中伸弥博士のようにノーベル賞もらえる成果をあげることができると見れませんか。いや、テレビで見ると博士は対談上手で、話しも分かりやすかったな。でも目立つ成果を発表しなければテレビに引っ張り出されることはないから大丈夫ですよ。

本日眼科受診。火曜と木曜は先生が決まっていない。今日の男先生はこちらを見てあいさつし、話してくれた。説明は明快で質問にも丁寧に答えてくれて快適で気持ち良かった。会計窓口でその旨伝えた。苦情を言うだけではないのです。

**お友達**

お医者さまは違う世界の人物、金持ちだとされるんだ、とやかみみながらみで信じていた。

同級生にも医者になったヤツがいる。高校時代も卒業してからも真つ当な人物である。特に大金持ちというところでもなさそう。旅で知り合ったお医者さんもいる。皆さん、友人知人として付き合う範囲ではまともな感じを受ける。診察室で患者と

向き合う時もそうであったであろう(みんなリタイアした)と信じる。クラス会の時、産婦人科を営むヤツが参加した。案の定よからぬ期待の質問が出た。期待半分、どう切り抜けるのかヒヤヒヤ半分の横目で覗いて見る。興味に恋えつつもきわどいところで患者医者双方の尊厳をそこなうことなく上手に座をつないだ。心得たものだ。仲間もそれ以上からまない。

仲間たち恵ガキの中には則を越えたヤツもいたけれど、みんなシエントルマンになっていた。我が母校は紳士を育てるべく建学された。「真間の流れ」は「清らか」で「心もずみてただ一途」に「文化のほこり」だ「平和のしるし」だ「自立のさかえ」だ、日本の未来は明るい。バンザイ。

佳き新年をお迎えください。



船橋市の接種会場。年末になって1、2回目の接種が始まっている。さつさとやったらどうだ、と思うが、迷っている人も、体調でやれない人もいる。中には、インフルエンザも含めてワクチン接種はやりたくない、と断る、という人もいます。2021/12/1、「船橋市中央公民館」

現れとみていいのかもしれない。総合病院の内科に通っていた。先生不足なのか行く度に違う若先生の時期があった。ある日、若男先生、診察室に入ると、指でポールパンをくるくる回していた。中高校生がよくやるあれです。緊張をほぐそうとしていたのか、単にクセが出ていたのだけなのか。ほくはその時、おぬし余を軽く見ましたなと、心がヒリリと感じた。さあお話を聞きましょう、という態度をみせろよ。

患者を待つ時にはこういう心掛けで、というようなのは座学でも実技でも、インターンの時も教わることはないのでしょうかね。

ある日の若女先生。お決まりの問診。カルテ(コンピューター)が使われ始めていたかな)から顔も目も離さず、そして無言となった。不自然に無言が続くので、おすおすとして終り



京成谷津駅真ん前の総合病院。船橋に移り住んで以来お世話になっている。くるくる回すポールパンやコミニケーション若手先生に出会った所。右下の白衣姿は、系列内科クリニックの院長先生。通りを隔てたビルに開院。診察券の番号は写真の大病院と共通。2019/2/26、習志野市谷津4 谷津保健病院



平均値

腎臓の働きを示す数字が上限を超えたから塩分を控えるように、と言われた。上限を超えたままで腎臓が傷むと、もとに戻らなくなり透析しなければならなくなる、とも言われた。

血液検査結果を見ると、たくさん項目があって基準範囲とか上限値下限値とかいう欄がある。この数値を外れると病気として治療の対象になる。

腎臓が弱ってきたことは見た目ではわからない。外見でわかる、例えば身長も基準値があるのだろうか。人を見たとときに無意識に「フツー」だと判断する。この「フツー」が基準値だろうか。ほとくの身長は調べるたびに小さくなっていく。そのうち無くなるのではないかと心配して手紙に書いたら、ゼロにならない内に呑もう、と返事をもらった。先だって縄文時代の全身骨格が見つかって、その身長がほくぐらいたと新聞に出ていた。ほくは縄文時代の基準値らしい。低身長症というのがあるらしい。ほくはどうなんだろう。

精神活動にも基準値があるのだから

うか。なにかやったりししゃべったりするのを見て、「フツーじゃない、異常だ」と言うのを聞く。ほくもそう思うことがある。どこからどこまでが「フツー」なのだろうか。

精神科の閉鎖病棟に行ったことはありますか。裸で床に寝転がっている「フツー」じゃないなと思う。近づいてきて、ありがとうございませう、また来てあげてくださいね、と挨拶されると、なんでこの人がここに居るのか、と思う。

弱い薬でいいだろう、入院治療が必要だ、開放病棟は剣呑だから閉鎖病棟に、というように医師はどうやって判断しているのだろうか。

コト

眼科の美人先生に、緑内障の手術を希望した。ついでに白内障も、話をした。紹介された総合病院の眼科に行った。待っている時に看護師と話すと、当病院では緑内障の手術は



検温セルフチェック器。「表面温度異常警報」アラームが鳴ると「マスクを付けてください」と音声で注意してくれる。下のほうは手消毒器。 2021/12/1、「ビビット」南船橋

していないという。当然、紹介状には白内障の手術を、とあるだけだろう。心乱れ、あやうく手術担当の女先生に八つ当たりしそうになった。美人先生は緑内障は急がないでよいので今回は白内障を、と考えたのだろう。それがまったく本人のほかに伝わっていない。説明なし。コミュニケーションが成立していないのだ。美人先生は一方的に言いいたいことを言って診察終わり、質問する余裕なし、質問してもなんかつつねんどんだなあと感じる返事。

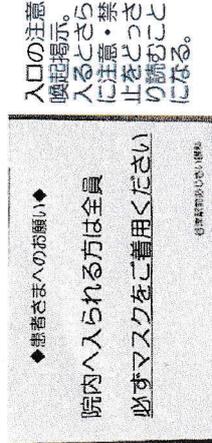
手術担当の女先生から、左右とも済んだあとの診察で「どうですか」と聞かれた。当たり前のように、世の中が明るくなりましてたとお礼を述べると、「それは結構でした」と言われ、心も明るくなった。

病院や先生には、いうまでもなく感謝しているが、文句もある。この際一拳にぶちまける。といても理性にあらわれ冷静沈着賢いほくでありますから、ほどほどに。ただし注力と集中力に欠けるらしいのでちょっと危うい。

昔、ある科を訪ねたことがある。それは何日前からですか、と問われたので、五、六日前くらいかな、と答えた。すると五日前ですか六日前ですかと問われた。びっくりかつあわてた。そんなこと今までに聞かれ

たことがない。行くのを止めた。年を経て、急性難聴になった時、早ければ早いほど治る可能性がある、時間が経つと治療はほぼダメ、と説明を受けた。病気によっては五日前か六日前かで治療に違いがあるのかも知れない、と反省している。(そういう病気だったか否か)

禁止



巷には禁止が多い。いつの頃だったろうか、禁止という言葉を選べる工夫がされて、たとえば、京成の駅のトイレで「きれいに使ってください」という張り紙を見たりすることがある。

こ遠慮下さい、という表現が割と多く使われる。しかし、ほくみたいに、遠慮しないよ、というひねくれじいもいる。はてさてポスター作りの皆さん大変ですね。

またまた眼科のお話し。院長は先に触れた美人さんで、総合病院時代から、独立開院してからも引き続き診てもらっている。美人だから全て良いというわけにはいかず、近頃通院がなんとなく憂鬱である。